

多様性と自立

杜陵高創立100周年

◆ 下 ◆

「この学校で再スタートとを考えれば考えるほど、心身に不調を来した。周りに出せた」。杜陵高通信制生徒会長の水野花梨さん(3年)は、不登校だった中学生時代、今の自分を想像できなかつた。

普段は自宅などで学ぶ通信制。後期のスクーリング(面接指導時間)が始まった日曜日の6日、選択した時間割に沿って授業を受けた。

制服はなく、クラスメートの服装は思い思い。髪や爪の色も個性的で、指輪やピアスをつけた人もいる。大学のような雰囲気である。水野さんは中学に通うこの時間が流れる。「われら働き学ぶもの」の校歌の通り、創立初期は

勤労青年が学んだ同校。今は不登校や中途退学者といふ、生きつらさや事情を抱えた生徒が多く通う。全国的に「多様性の受け皿」として通信制高校の存在感が高まり、本県でも私立高の課程や、県外に本校

がある「広域通信制」が増加。そうした中でも、杜陵高の通信制は約330人で横ばいをたどる。

三田正巳校長は「スクーリングの日数や行事を基準より確保している。社会に出て困らないよう、人との交わりを通じた成長を大切にしていくことは変わらない」と力を込める。個性と多様性を尊重し、自立の一步を支え続けて1世紀。岩手の公立定時通信制のセンタースクールとして、確かな歩みを刻んでいく。(内城俊充)

公立定時通信センター高

「一步」支え未来描く



スクーリングで化学の授業に臨む水野花梨さん(右)。杜陵高で前向きに変わることができた

杜陵高の通信制。学自習を基本に、生活スタイルや希望に合わせてスクーリング(面接指導時間)に出席し、卒業を目指す。前・後期に各10日以上登校と、年間10時間以上の特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)への参加が必要。学習の成果をレポートで提出し、テストを受けて単位認定する。

※ 岩手日報 2024年10月12日(土)付 この記事は岩手日報の許諾を得て転載しています。